

（号）取用
残部
等

統合教育科目〈主題別科目群〉

統合教育における学生の自主的研究活動導入の試み

—— ひとつのケース・スタディーから ——

稲 賀 繁 美

三 重 大 学 一 般 教 育
大学教育研究 —三重大学授業研究交流誌—
第 4 号 別 刷
1 9 9 6 年 3 月 発 行

統合教育科目<主題別科目>

統合教育における学生の自主的研究活動導入の試み

—ひとつのケース・スタディーから—

稲 賀 繁 美*

はじめに

大学の教育改革はけっして制度や組織の改革にのみ限定されるものではない。しかるに行政の常として、改革案といえば予算獲得に結び付くものとする通念は拭いがたく存続している。かくて今回の大学改革も、いつしか学部改組へと話がずれてゆき、その結果、出発点にあったはずの教育改革は途中で置き去りともなりかねない状況になってきた。

三重大学における一般教育から共通教育への移行にあっても、当初あれだけ熱心に議論された統合教育は、まだ実現に移されたとは言いがたい。本年度はその本格的な実施初年度であり、新入生用の『三重大学共通教育履修案内』では、冒頭でその主旨を詳細に説明している⁽¹⁾。だが、組織の移管についての手続き上の問題など技術的な制約もあって、統合教育という理念を全学参加の共通教育の枠において軌道に乗せるにはなお至っていない。とりわけ実施組織の改組が来年度を予定しているため、本年度の授業は旧課程と同様の組織によって運営された。このため担当者のあいだにはまだ統合教育の理念が十分に浸透しているとは言いがたい。以下に本年度組織の面で実施に至らなかった問題点を列挙する。

(1) 主題別科目群としての運営基盤の未整備

授業実施にあっては7つの主題(A-G)に基づいて授業科目が全面的に再編成されたが、実施組織においてその裏付けがない。つまり専任教員にあっても、主題ごとの授業運営に必要な会議を設定することひとつ、本年度はなお全学的な承認を得ていない。

(2) 主題に属する非常勤講師の扱いの困難

さらに非常勤教員をこのあたらしい運営組織のなかにいかに位置付けるかが煮詰まっていない。従来は事務部ないしは最寄りの教室なり学科目が実際上の面倒を見て来たが、授業運営主体が主題別となれば、非常勤もこの主題ごとでお世話すべきものであろう。だが主題の責任者(チェア・パーソンと呼称)には、その権限も形式的には与えられていないし、たまたまその主題にくられた科目担当の非常勤講師との接触の機会も制度的にも個人的な次元でも保証されておらず、対応に苦慮する例も見られるに至っている。

(3) チェア・パーソンの権限と負担への手当の未整備

またチェア・パーソンのありかたが十分に検討されていない。チェア・パーソンは非常勤とりわけ共通セミナール担当講師との連絡、主題別科目の調整や主題別の担当者会議の主宰、予定される主題論文作成のための学生への個別面談や指導を含めた対応、そのための書類上の認可など、かなりの質量に達する業務をこなすこととなると想定される。だが当然予想されるこうした負担にたいする対策もまだ立てられてはいない。「主題研究」が授業科目に準ずる扱いを受けている以上、これは正規の授業負担として算定されるべきであろう。またオフィス・アワーを設けて、それを時間割および履修案内に明記することは、教務上からみても最低限必要であろう。だが現在のままではそれはチェア・パーソンとなった教員の単純な労働強化を意味することとなるだろう。負担の軽減や負担に相当したコマ数の勘案なども、現実に対処するにはさまざま

* 三重大学人文学部文化学科

まな困難が予想される。教育上の負担には限界があるにもかかわらず、専任教員として従来どおりの義務のうえに、さらにチェア・パーソンとして業務が上乘せされかねない状況だからである。チェア・パーソンの役割が統合教育の成否を分かっただけに、この点はとりわけ全学的な見地にたった対応が必要となろう。

- (4) **主題群を構成しない科目の扱いの不透明さ**
またやや付帯的な問題として、なお特定主題に属さない授業科目群（Z）が相当数残っている。来年度以降の授業運営が主題を単位としてなされる以上、Z群はいまのままでは自分たちを束ねる会議を招集することも、その意見代表を統合教育部会や分科会に派遣することも、立場上できないし、かつする意志もない、という変則的な状況となりかねない。こうした運営状況は到底正常なものとは認知しがたいだろう。しかしながら、これらの科目担当者からは、なお主題の編成という理念そのものにたいして疑義が表明される場合もある。むろんおのおのの科目の運営にあたっては、科目担当者が主体的に主題を選定・立案し、それを自主的に運営するのが建前でありかつ理想でもあろう。だが改革に関するさまざまな途中経過もあって、「主題」の設定に関しては、理念においてなお学部・学部の授業担当者（共通）教育で立案され全学の承認を得た決定とのあいだには齟齬が残っている。授業担当者の同意を固めることなくなされた決定は手続きとして承認できず、そうした状況下で「主題」なるものに参画し、積極的な協力をするとは、教育の理念からも首肯できない、とする意見が厳然として存在する。このことは、事実として謙虚に受け止める必要があろう。なお場合によっては、これらの科目を一括して文系の基礎科目などとし、あくまで担当者の意思を尊重しつつ、別の扱いとして括することも考慮されるべきだろう。

- (5) **主題別科目群の履修条件に関する足並みの不揃い**

これに付随して看過できないのは、統合教育科目の主たる実施主体たる人文学部において、

社会科学科が本年度のところ主題登録を必修とは認めていない、という状況である。共通教育の運営にあって全学で導入が決定された科目編成に対して、その授業担当者の集団が学科の選択としては、当該の学生にその履修を積極的には義務づける意思を持っていない。この矛盾は、今回の教育改革の課程での意思形成における不手際が、教務上の規定のなかに姿をかえて出現し、なお屈曲したかたちで存続していることを示している。

- (6) **全学的な合意形成にむけての将来への課題**
こうした合意の不徹底さは、統合教育において特定の主題群から何単位履修を学生に義務づけるか、という点にかんして、なお各学部の歩調が揃わない点にも露呈している。統合教育が真に内実を伴ったものとして発展していくか否かは、全学の賛同と協力を仰げるか否かにかわっている。すなわち科目実施教官の意識と制度との齟齬および、各学部の教務上の見解の相違をいかに乗り越えることが可能か、がなお将来の課題として残っている。

以上、総論として統合教育科目運営になお残る課題をいくつか指摘した。これらはどちらかといえば教育内容というよりは、制度改革に付随する問題であった。以下本論では、むしろ教育実践の場における改革の理念と現状とを、具体例から検討したい。

1 知識吸収型から問題意識形成型へ

統合教育の理念の出発点には、「まず学生に学習モチーフを与え、自発的な学習態度への転換を促し、さらに必要な基礎的能力の養成を行うこと」がうたわれている⁽²⁾。この理念は具体的に実施に移さない限り、ただのうたい文句に終わってしまうであろう。また、共通セミナー、総合科目、通常科目の3種類の科目を組み合わせることで学生の学力を「統合」し、その成果を「主題研究」へと導くことに、「統合教育」の理念があるとしても、それが実際にはどのような現状認識から生まれたのかを忘れては、おのおのの科目はばらばらになって空中分解してしまう

であろう。ここで統合教育の理念を復習しておく所以である。

まず学生による特定主題の主体的な選択、異なった形態の授業の系統的な履修が、ふたつの大前提となる。そのうえで

- (1) オムニバス形式の「総合科目」による問題意識の開発、
 - (2) 「通常科目」における体系的な知識習得による問題意識の定着、
 - (3) 「共通セミナー」による学生自らの調査・研究・発表の課程での問題意識の掘り起こし、
 - (4) 最後にそうして練られた問題意識に貫かれ、事実の裏付けと学生自らの調査研究に立脚した成果を「主題論文」にまとめる、
- という4段階の作業が、「統合教育」のめざす科目実施形態として提唱された⁽³⁾。

従来的一般教育科目ではこの(1)から(4)にいたる理念を実際の授業の現場で実現することは到底不可能であった。まず週1度の授業という頻度と、個々の授業がばらばらでお互いに有機的な関連がないことからくる限界、つぎに自習を前提としても実際には学生が自習することは期待できず、またそれを要求することもできない勉学環境、さらにマスプロ的多数教育ゆえの学生への個別指導の困難さ、最後に教官と学生が互いに相手を敬遠して接触を嫌い、独演会と私語に分裂したまま、ひたすらことなかれ主義に走る逃避傾向。これらの制約が従来的一般教育が具体的な成果をあげるうえでの足枷となってきた。

筆者が担当している一般(共通)教育科目「比較文化」では4年前から、この現状を打破すべくいろいろな試みを模索してきた。毎週1コマの範囲内でうえにのべたような限界をどこまで解消することができるか、どこに越えがたい限界があるのか、それを今回の統合教育の導入によっていかに乗り越えようとしているのか、を以下に分析してご報告申し上げる。もとより特殊な一例にすぎまいが、今後の授業改善のため、いささかなりとも参考となれば幸いである。

筆者は1990年度から三重大大学の一般教育で「比較文化」という授業を担当したが、通常の、

知識刷り込み型の授業ではまったく学生たちの問題意識を引き出せないことが、最初の2年間の経験で明らかとなった。そもそも大多数の学生たちは、日本のその世界や人々の生活ぶりなどまったく知らず、高等学校までの教科書にあった記述をひたすら現実と同一視し、世の中の本にはすべて本当のことしか書いてないと信じこみ、おのれが善と信ずる価値観が世界の善でありえないはずがない、といった独善的な思考法を脱していない。さらには受験体制ゆえか、世界史、日本史、地理のいずれかしかまともに履修していないため、それらを総合した知識を前提として必要とする話題はほとんど理解不能なうえに、新聞やマスメディアのニュースにもほとんど関心がなく、授業で授けられる知識は自分たちの生活とは無関係とハナから割り切っており、自分たちがこの社会の能動的な構成員であってそこに働きかける可能性のみならず義務をも担っているのだ、といった自覚とも無縁なままの学生たちが相手である。高校までに漠然と植え付けられてきた価値観が実際には日本を一步外に出ればまったく通用しない場合も多く、そうした価値観の衝突が現実を織り成しているのだ、といったことひとつ納得させるのも容易でない。ひたすら白黒が明白な結果に飛び付きたがる、年齢ゆえの性急さ、単位取得に必要な術語を暗記することが勉強だと勘違いしている優等生、知識は教壇から一方的かつ无尽蔵に降ってくるものであり、それを吸収さえしていれば良いという受け身な学習態度。そうした前提を崩す試みは、能率主義の学生からはソッポを向かれ、ナイーヴで真面目な学生はいままで信じていた世界を壊されて不安になり、また要求される課題への対応が分からず脱落者も続出する。

とりわけ学生のレポートに対する考え方を根本的に指導しなおす必要が痛感された。内容からいえば、問題意識の欠如、情報皆無の単なる授業の感想文、授業で語られた内容を鸚鵡返しに復唱するのみの報告、参考書や百科事典の丸写し、意見形成の未成熟ないしは高飛車な提言や政治的アピール、事実調査に立脚した具体的

提言の欠落など。また形式からいえば、文章の形をなしていないメモ同然のノート、引用の手続きへの無知、著作権への無頓着、論旨展開や段落構成への無関心、情報の不確かさと事実確認作業の欠落、情報伝達の意欲の欠如、第三者の読者をまったく予想していない教師依存馴れ合い症候群。そして極めつきは、氏名、所属学部、提出先宛て名、授業名、課題名などにひとつ書いていない「レポート」を提出して平然としている、すべてあなた任せ型の無配慮拙劣学生。いくら口を酸っぱくして注意しておいても、これが毎年かならず何名か出現する。

こうした、いわば大学での勉学だ研究だなどという水準以前の現実を目の前にして、授業そのものの目標設定を根本的に考え直す必要に迫られた。専門研究の成果に立脚した授業を提供したところで、学生側にはそうした知識や情報への渴望そのものが存在しない。比較文化なら比較文化という授業を聴講してもらえるような学生の側の前提条件を整備することから、あらためて取り組まなければならなかった。そのためには、大学初期教育の段階で高等学校までの学習観を転換する必要があることが明確となってきた。いわゆる受動的な知識刷り込み型の受講姿勢から、問題発見型、問題意識形成型の学習観への切り替えを目指すこと。それがあらたな授業の目標設定となってきた。

2 授業の意義と目標の再設定

以上のような問題意識に立って、1992年度以降、授業形態を大幅に改革した。最大の眼目は、受講学生の関心に沿って自主的なリサーチ・グループの形成を促し、その成果報告を成績評価の柱としたことである。授業そのものは、リサーチ・グループの活動に必要な手法や情報、倫理的な心構えを側面から補強するものとして位置付けた。学生たちの自主的な活動の途中で具体的な問題が発生する頃を見計らって、その解決に必要な手段を比較文化的な視点から具体例の分析を通じて提供するわけである。1992年度の最初の自己点検・評価報告書にその初期形態を

既に報告している⁽⁴⁾。ここでは1994年度の授業の自己点検・評価の機会にその主旨を改めてまとめたので、以下、関連する部分を引用する。

・意義

日本で高等学校までに受けてきた教育は、いったん日本の外に出るとまったく使いものにならない場合が多い。だが学生たちの大多数はその事実そのものに気付く機会すらまだ得ていない。異質な文化に触れたこともない学生たちにはたして「比較文化」は教授可能か。そもそも異質なものを比較することは可能なのか、その場合の基準をどこに据えることが可能なのか、といった設問に対しても、学生はほとんど精神的に準備ができていない。日本で善とされる価値観や行動様式が通用しない世界の存在することへと認識を導き、さらにそうした異質な文化に対する感情的な拒絶反応や差別意識ではない、開かれた対話の回路を培うための基礎を養成すること。つまり比較文化という作業を生涯教育の一環として実践できるような精神構造を育む機会たることに、本授業の意義を設定する。

・目標

- (1) もはや正解が前もって与えられているわけではない今日の社会・文化的状況、国際関係を前にして、社会に対する能動的な問題意識、責任ある意見形成を促すことを目標とする。
- (2) また具体的な授業方法としては、このような目標に不可欠な情報収集・処理能力、批判力・判断力・発言力の養成を目標とする。級友とひたすら同一のペーパー試験で点を競い合うのみ、という競争原理を突き崩し、自分たちで課題を設定し、調査を立案・実行し、結果を報告する。この訓練を通じて、タスク・フォース的なグループを運営し、衝突しつつも協力することの意義を納得してもらおうことが、第二の目標である。
- (3) 最後に授業そのものは、学生たちの調査活動を側面から支援し、必要な助言を適切な文脈で、比較文化史的視点(価値観の衝突とその分析、紛争・論争の調停・合意の可能性、情報流通の恣意性、異文化接触における倫理的の可能性の哲学的検討)から授けることを目

標とする。

・開講の現状

- (1) ほとんど何の目的意識もないままに大学に進学してくる学生が大半であるため、大学における初期教育での動機付けを重視する。頻繁に学生アンケートを実施し、感想を募っては添削・返却し、意識の覚醒に努める。学生たちの反応を見計らって、時機が熟したところで調査グループの自主的な組織を促した結果、以下のような関心に従って、平均5名前後のリサーチ・グループが形成された。
- (2) すなわち・教育とは何か・知ってるつもり三重大学・日本に住む外国人と私たち・文化摩擦を考え、体験する・社会の仕組みを自分たちの足を使って調べてみる・現場に聞こう、現場を知ろう・調査旅行報告・みじかな国際問題に目を啓こう：私たちに何ができるか等。各系列で具体的な提案がなされ、それに基づいて実施された調査結果をもって授業評価の対象とした。
- (3) 授業では文化比較の際に必要な情報収集・処理の基本的な方法や手法を、具体的な比較文化史的事例の分析を通じて伝授し、レポートの作成に活用するべく働きかけた。
- (4) レポート作成に際しては、情報の咀嚼と批判、論証の構成と判断の是非、手分け作業の組織と作業分担者同士の相互責任といった要素を、これも具体的な記事の批判的分析を通じて伝授し、活用を促した⁽⁵⁾。

資料1は、学生に配布している「レポート作成の要領」である。

資料 1 グループ活動によるレポート作成の要領

- なによりも大切なのは、なぜだろうという疑問、せひこれを調べたいという意欲。概論を目指す、参考書物をそのまま書き写すはめになる（これは不可）。できるだけ個別の問題を拾いだし、ピン・ポイントで現場を実地に踏んでみる体験が大切だし、おもしろい。
- 活動の成否は構成員の積極的な参加と協力、切磋琢磨が実現するか否かにある。
- 表紙に（1）課題（2）個々人の執筆分担ないしは作業分担（3）各自の氏名、学部名、学

生番号（4）提出先授業名、教官名を明記（これは人にもものを提出する場合の最低限の礼儀ですよ）。

●目次、前書きを入れて、章ごとの個人の分担をはっきりさせる。夏休みまでに十分全員で調査の問題点を洗いだし、役割分担を話し合っておきたい。さもないと収拾不能になる。

●提出レポートの前書きは、すべてが出揃った後を書く。実際に調べはじめないと、何を調べればよいのか分らない。その過程で受け持ち分担の再編成も必要になる。臨機応変と柔軟さが大切。全員のレポートが出揃ったところで、提出前に編集しなおすとすっきりする。冒頭から巻末へと通読すると、おのずと諸君の体験が読者にも納得でき、諸君の問題意識と取り組みが浮かび上がるような一冊の書物を仕上げよう、という気持ちが必要。

●前書きでは（1）なぜその課題を取り上げたのかの理由を説明し、（2）問題意識を明確に表明する－何を調べるのか－（3）またその問題にたいしていかなるアプローチを試みるのか、の計画を（4）グループ構成員の役割分担に即して1～2ページに要約すること。

●個々の章はたんなる感想の羅列でもこまるし、またたんなる事実調べ、調査報告のデータだけでも困る。草稿やプランニングは大胆に。だが浄書では構成を練る。それぞれに章毎に（1）「序」として取り上げる問題と取り組みの方法を説明のうえ（2）「本文」では、具体的な調査とその結果の報告を行い（3）「結論」において、当初の計画と調査結果とを比較したうえで、成果となる「提言」を具体的かつ明確に述べる。「政府はこの問題にもっと積極的に取り組むべきである」といったクソ一般論では無意味。「気がします」「思います」の濫発も発言の根拠を弱める。（4）本文には適宜「小見出し」を入れて、問題をいくつかに分ける。分析をすすめてゆくうえで頭の整理にもなるし、あらたな問題点も明確となり、読者にもメッセージが伝えやすくなる。（5）なぜこれを調べているのか、には拘りたい。

●「あとがき」には正直な感想を書いてみよう。グループで調査し討議することの意義やむづかしさ、グループをまとめるうえでの具体的な苦心点。今後の課題（単位レポートにとどまらずサークルに発展してもよい）などをまとめ、個人の意見を盛ると楽しい。

●チェックリスト（これが採点の基準にもなります）

- (1) 諸君の調査の経験が活かされ、その内容が

リポートの文面に盛られているか。

- (2) 調査に立脚した情報量がきちんとデータとして盛られているか。情報の出所は?
- (3) チーム構成員の役割分担がきちんと出来て、グループとしてまとまっているか。
- (4) 各章も全体も構成(序/本文、結論/あとがき、など)がきちんと出来ているか。
- (5) 構成員の氏名、所属、参考文献、引用註などの形式要件を満たしているか。
- (6) 当初の問題意識、目標設定にたいしてきちんとした回答が出来ているか。

3 学生の研究作業を勘案した授業日程

つぎに具体的な運営の実際を日程表に示しておこう。学生にアンケートや課題を課して徐々に問題意識を煮詰めてゆき、頃合を見計らって、学生たちが必要としている知識を授業で提供するという作業を週1度の授業の頻度で行う場合、前期半年間の予定はおおよそこのあたりに落ち着く様子である。ただ実際には毎年学生の気質は確実に異なるし、参加人数にも興味関心にも変動がある。したがって、日程の予定を杓子定規に実施するのでは、期待した反応を引き出すことはできない。「頃合」はあくまで学生次第なのである。

資料2に示したのが、1995年度の場合の日程予定である。左側には毎回の講義課題、各回の最後の項に示したのが、毎回の学生への働きかけの日程であり、両者が噛み合せて相互に関連しながら、毎週フィードバックを欠かさぬようにして進行してゆくように工夫した。まず新入生の問題意識を点火し、徐々に発展させ、具体的な研究課題を自覚させ、グループの形成を手助けする。これを5月の連休までに実現できれば、早いグループは連休を利用して活動に入る。残る授業では課題研究に必要な手法を、学生が必要とする段階で個々に例示してゆく。情報収集法、フィールド・ワーク、アンケート実施の実際、アポイントメントの取り方。グループ作業での手分けと総合、トラブルとの対処。比較の手法や統計処理の基礎。資料や問題点の整理法やリポートとしての編集方法など。

そこでとくに留意している点がふたつある。まず学生の側にそうした手法を実際に使う必要性が高まってこない限り、いわゆる形式的なノーハウ伝授は効果をあげ得ない。教授した手法を実際に活用させて身に付けさせるための課題を課することが必要となる。たとえば実際に新聞記事を複数切り抜いて比較のうえ考察することとか、序文本論結論という3部構成と、本論で複数の論点を小見出しで整理するといった形式をきちんと踏んだリポートの提出を、グループ活動の中間報告として求める、といった工夫である。もうひとつは、こうした作業のなかでの学生自身の発見を通じて、少しずつ比較文化という視点に開眼させ、学生の問題意識をも開発させながら、リポート作成にむけて目標を煮詰めさせる、という配慮である。

資料 2 比較文化 異文化接融論

稲賀 繁美 1995年度予定日程表

- (1) 4月14日 イントロダクション
 1. 主題別科目群の主旨: 比較文化/総合科目/主題研究/共通セミナーとの関連説明
 2. 大学での生活: 食生活/事務職員への配慮/生協ニュース/生協・近隣書店での書籍注文
 3. 大学での勉強のための知的道具: 図書館/美術館/ノート活用法/情報へのアクセス
 4. 大学へはいつの目標: 大学の国際比較/具体的な新聞記事を出発点にして/学生意識調査アンケート/調査グループ課題目標調べ(A)
- (2) 4月21日 人に読んで貰える文章作法、構成法(問題設定/本論/具体的情報/結論と提言)/アンケート講評/調査希望一次集計
- (3) 4月28日 大学で何をするのか: 大学の国際比較を通じて/調査グループ構成準備
- (4) 5月12日 外国を知ること: 客観的知識批判、いわゆる「オリエンタリズム」批判/調査グループ構成員発表
- (5) 5月19日 国際化、国際人になるとはどういうことか: 国際機関の検証から/調査グループ活動計画提出
- (6) 5月26日 外国語(英語)と付き合うこと/英語教育再考/『英語帝国主義論』批判/世界のなかの日本の大学/英語教育問題感想提出

- (7) 6月9日 断髪と比較文化史：東アジアの近代化／3項対比による立体視の実践例／論文構成の指導：感想文から大学のレポートへ
- (8) 6月16日 新聞の読み方（戦争責任発言とその報道論争をめぐって）：視点差の地勢学／調査グループのなかでの見解の対立と仕事の分担の再検討
- (9) 6月23日 情報の蓄積と活用法（原爆投下是非論争を題材に）／論文作法の実践：新聞記事分析りポート提出
- (10) 6月30日 女子割礼問題の比較文化的考察：他者の価値観の善悪を判断する根拠とは？／授業で取り上げた問題に対する見解アンケート
- (11) 7月7日 サルマーン・ラシュディ事件：世界のなかの日本の責任／前回のアンケートの集計と講評
- (12) 7月14日 ヴォランティア活動の比較文化：中田厚仁氏の殺害と日本の反応／（9-11）への意見提出（問題点呈示・情報収集・利用・見解表明）
- (13) 9月1日 面接日：レポート取りまとめに関する個別の質問受付
- (14) 9月8日 試験日：試験は行わない 本日 PM. 5:00 グループ・レポート提出期限
* なお1-2度補講を行う予定。
* * レポートは講評、誤字添削のうえ、後期開始の頃に学生各自へ返却。

がある。問題は、確固とした目的意識もないままに付和雷同的にグループに加わる学生の存在かもしれない。

資料 2-a 比較文化 1995年度 アンケート

4月14日実施 4月19日 5:00までに一般教育
入り口メール・ボックスまで提出のこと

学部 学生証番号 氏名

- (1) 大学入学時のオリエンテーションについて：
日程、手続きや内容などにつき、改善すべき点があれば具体的に指摘してください。
- (2) 三重大学に入って何をしたいか。具体的な目標をあげたい。
- (3) 卒業までの4年間にこれだけはやろう、実現しよう、達成しよう、という計画と年次予定を描きたい。
- (4) 大学／講義に何を期待するか。
- (5) 今何を調べたいか。グループを作って調査し、夏休みあけまでに完成できるような具体的な提案をしたい。明確な目標意識、実地調査の可能性、ひとりでは不可能な課題を。

4 グループ活動の意義

学生の関心の動向を調べるためのアンケートを4月の一回目の授業で実施するのは、実際には時期尚早である。突然予期もしていなかった要求を突き付けられて戸惑う学生も多い。だがこれは何か自分たちで問題を発見し目標を設定しなくてはいけないのだ、という心構えを据えるための、呼び水であり、受け身から自主性へのショック療法である。昨年の状況（上記2で触れた）を情報として提供し、また第1回目の集計をグループ分けしながら批評するという作業を次週の2回目の授業で繰り返し、再度アンケートを取る。18才の若者たちが、さあ大学に入ったという、希望に溢れているべき時に、それでは今何をしたい、とたずねられても、ほとんどなんら具体的なイメージが沸かない、という現実。そこに受験の、そして日本の高校までの教育の重圧と歪みとを見ないわけにはゆくまい。ひたすら自主的選択を抹殺し、人生計画への自覚を先延ばしにするだけの生活に何の疑問も感じてこなかった新入生たちに、そうした

ここで（A）にあげた新入生へのアンケートには、ふたつの意図がある。まず目的意識もないまま漫然として大学に入ってきた自分たちのありかたを意識させ、早めに大学での勉学や生活での目標を設定させること。それとともに、ここで浮上してきた問題意識との関連で、グループ活動への学生たちの関心を高め、またそのための関心动向を調べ、調査グループ形成にあたって学生たちが利用できる基礎資料とすることである。1995年度の場合、具体的設問は資料2-aのとおり。

学生たちは専用の掲示板を利用して4月下旬にはグループ形成に取り掛かる。なお強制は心理的にも良い結果を生まないため、どうしてもグループ活動を望まないものは単独で作業してもよいことにしている。逆にグループの責任者を買って出た学生の成長ぶりには著しいもの

惰性のままでは大学生活は無駄になることを悟らせて、新たな目標を設定させるには、最低数回のキャッチボールが必要となる。

そのすえようやく学生たちの目鼻が定まってきたあたりからは、グループの自己組織化に取り組ませる。要は「この指とまれ」の方法を学生たち自身に考えさせるわけだ。専用の掲示板・伝言板のアイディアも、学生たちの要求に事務局のご理解が得られて誕生した。すべて教官がお膳立てしてしまったのでは、自主的な活動という名のお仕着せになってしまう。また先輩の世代の継承と新入生による発案との兼ね合いにも、微妙な匙加減が必要となる。昨年いかにうまくいった課題でも、押し付けるのは禁物なのだ。

2回のアンケートの過程で、大学の初期教育に何が必要かも把握されてくる。まず大多数の学生は、高等学校までで自主的に研究目標を設定して学習するという経験もしなければ、またグループを作って共同で作業をするという体験ももってはいない。そこに浮かびあがるのは、画一化された競争原理と偏差値によって能力別に輪切りにされ、同一の模範解答を目指して横並びに均一で、しかしばらばらに進んで行く個人からなる集団というイメージだろう。ひとりひとりの長所や個性を互いに認めあって助け合う経験もなく、異質な価値観をもった人間との付き合いもないまま、ほぼ同一の教育を受け、同一の国語をしゃべる同世代の人間たちと、仕事のうえでの仲間意識を共有することもないまま、試験となればひたすら周囲を押し回すことだけを行動原理として社会にでて行き、やがては社会を動かしてゆくのが大部分の大学生である。自分自身で責任ある目標設定をすることもなくひたすら状況に流されるばかりで、課題解決のためにタスク・フォースを自分たちで築く能力もない大学生たち。ここに教育上巨大な空洞があるのは明らかだろう。

そもそもグループという発案の背後には、1990年から最初の2年間の経験がある。つまり個人での調査に立脚した期末レポートでは、調査範囲にも問題の掘り下げ方にもあまりに限界

が多く、おまけに例えば英語教育問題について似たり寄ったりの作文が大量に出現する事態に、教師として、どうにも食い足りなく、また壮大なエネルギーの無駄を見る思いがしたからである。協力、作業分担、情報収集作業という発想が学生たちには完璧に欠落していた。

おりから一般教育の特別講演会に講師として招かれ、その後本学の教官となられたサンガ・ンゴイ先生のザイルにおける「アフリカ村起こし運動」のお話したいへん参考になった。すなわち実際に社会で何かを実現しようとする場合には、ひとりではできることの限界と無力をつくづく悟られる。だがそこで挫折せずに目標を同じくする仲間を作ってゆくことが、苦労も多いけれども大切だ、との主旨だった。日本の教育そして社会にいま一番必要でありながら、もっとも欠けているものを自覚させてもらった、という記憶がいまに残る。そしてこのサンガ先生へのインタビュー記事をまとめた中屋さんという学生は、たまたまその前の年の授業でも、積極的な推進役を果たしていて、グループのリーダーとしての実績を身をもって示していた。これらおふたりをお手本にして、学生たちに自分たちで何かを作らせる工夫をしよう、と思いたったようなわけである⁽⁷⁾。

5 グループ活動の実際

授業時間だけでは、とても時間が足りない。そのため、学生たちのグループ活動はあくまで課外活動となる。そのためのガイドラインを設定した。それを資料3として示す。ここにあげたのは1993年度のものである。なお論点が多岐にわたるため、現在の執筆時の時点での補注(B-P)を付し、グループ活動に関する分析にかえる。

資料 3 課外活動コミティーについての注意

●学期末に報告というかたちでレポートをまとめたい。ただ単に単位取得のためではなく、具体的なグループ研究体験を大学初年度にもってもらうことが眼目である(B)。

●あくまで関心のある学生の自由意思を旨とする。参加しなくとも成績に影響はしない。ただし積極的にイニシアティブを取った成果は評価に加算される。

●昨年度(1992年)には「図書館改善コミッティー」(2班)、「英語教育検討コミッティー」(C)、「授業料検討コミッティー」(3班)(D)、「留学生交流コミッティー」(2班)(E)などが出来た。さらに本年は、「看護婦／夫さんの生活を知る会」、「医学部の時間割を考える」、「自衛隊訪問部隊」、「記者に取材する—新聞社の仕事」、「卒業生たちの毎日—会社とはどんなところか」、「予備校、高校再訪—卒業生の目から受験を見直す」、などの提案がすでになされている(F)。具体的な目標をもち、できれば足で現場を調査できるような目標を、諸君のイニシアティブで見付けたい(G)。

●大人数グループは、5名程度のサブ・グループに分かれてそれぞれできるだけ重複しないように具体的な目標を再設定したい。連絡や役割分担もそのほうが楽(H)。グループにはリーダー(まとめ役)を立てる。リーダーは、グループ名、メンバーの名簿と学生証番号、所属学部、連絡先と活動計画書を教官まで伝えること(I)。金曜日午後を面会に当てるので、相談が必要な場合には人文3Fの研究室まで連絡してください(J)。

●グループごとに具体的な目標を設定し、その計画にそって資料収集、教官や関係者へのインタビュー、関係書籍の請求(要求を取りまとめて付属図書館に購入希望を出したい)に移りたい(K)。夏休みを利用しての実地調査、聞き取り調査などもお勧めする。

●作業のうえでの注意事項として、(1)特定政党、宗教団体などの見解を代弁することは謹んでください(2)政治的見解をまとめたり抗議文を作成するのではありません。それぞれ課題について、どこに問題があるのかを地道に探り、分析・検討して、どのような対応ができるか具体的に提言するのが目的です。(3)特定の関係者、部局(「文部省」、「政府自民党」、「大学当局」などなど)を攻撃目標としても「提言」にはなりません。(4)「取材」がおうおうにして衝突を起こすものであることを、十分に理解してください。事務の方には「守秘義務」ゆえに諸君には職務上提供できない情報があります(L)。そのことをはっきりさせるのはかまいませんが、事務のかたの立場や職務時間を侵害する行為は厳に謹んでください。(5)グループのなかでの対

立、感情的なもつれなども必ず生じますが、それを糧として乗り越えて行ってください。躓くことが学ことです。(6)必要な情報が得られず不満がたまる場合もあるでしょう。情報が無償のものではなく、苦勞なくしては入手できないことを身をもって体験してもらうのが、一番大切な勉強です(M)。

●学生ロビー西側の掲示板を「比較文化課外活動連絡掲示板」として使わせていただけることになりました。各グループの連絡のために、責任ある利用をお願いします(N)。

●9月提出のリポートは、各自の分担執筆箇所がきちんとわかるように目次を付け、氏名、学生証番号、学部名を明記のうえ、1冊に綴じ込んで提出する。「はじめに」「おわりに」を付けるとメリハリがつく(O)。「編集後記」には、この体験の苦心や課題を自由に書いてみよう。またできればワープロで編集してみたい。参考として1991年度総合科目、環境問題受講生論文集『聞けたか地球の叫び』(生協に平積み、777円)。協力者の登場に期待します。

●たまたま稲賀が発起の音頭をとりましたが、これはきっかけにすぎません。作業の相談にのってくださった先生に顧問をお願いするなどして、後期以降は、できればさらに先の調査・研究を自主的にすすめていただければ幸いです(P)。勉強するのは諸君、教師にはその手助けしかできません。比較文化は未知の世界を知ろうとする意欲から始まります。よい旅立ちを。

補注

B 学生はリポートを出しっぱなし、教官は講評もせず返却もしない、たまに返却しても学生は点を見ただけで捨ててしまう、というコミュニケーションの欠如を改めたかった。返却されたリポートを出発点にしてはじめて本当の勉強が始まるはずなのだが。

C 英語教育問題は4月に授業で取り上げれば、必ず何班かはこれを話題に取り上げる。この時期、筆者は一般教育問題検討特別委員会なる長い名称の委員で外国語教育改善のシナリオ作成に従事していたため、資料収集と学生の意見を徴する目的もあって、この話題を提供してみた。だが学生の意見は毎年まったく同一の反復なので、もはや新味がなくなり、また改革案も実施の運びとなったので、ここ

- 2年ほどこの話題は授業で取り上げていない。1995年は学生の側でも、この話題を提案した者はいなくなった。
- D 授業料の値上げがマスコミを賑わした年であったためか、学生の関心も高かった。だがこれ以降の新入生はもはやこの話題には反応しなくなった。
- E このチームはこの先、日本語教育の中畠先生、社会学の児玉先生を顧問として独立した学生サークルへと成長し、現在に至っている。これに似たケースで、授業後も活動を続けているものには、1995年度の「ハワイの子供たちにバスケット・ゴールを送ろう」チームがあり、この試みは新聞各紙の地方版で写真入りの扱いとなった⁽⁸⁾。
- F 教官側で作成したサクラも含むが、この年は学生の食いつきは極めて悪かった。昨年はうんぬん、という授業での指摘に、かえって反発し萎縮した面があるようだ。
- G 図書館などで文献調査のみに終わってしまったグループは概して意欲に欠ける報告し olmayan傾向がある。逆に実際に社会の人々と接触したグループは、自分たちがいかに現実を知らなかったかに驚愕したり、逆に思わぬ好意を得て感激したり、といった違いはあるにしても、概していままでの人生では味わったことのない体験に目を拓かれる場合が多い。ただしあまりに体験が強烈だとリポートという枠ではどうしても報告ができなくて戸惑う場合も多い。本来の教育はこの戸惑いをこそ出発点とすべきだろうが。
- H 5～6名が最適規模の様子。それ以上では何もしない学生が出現し、まとまりも極端に悪くなる。リーダーシップを取れる学生の有無、問題意識の共有の度合い、無気力参加者や寄生根性の学生の有無が成否を分ける。全体としての成果がそこそこの水準となっている場合でも、他者依存傾向の強い学生は、チームで命ぜられた調査を消極的にこなすだけで終わってしまい、部分執筆箇所も独立したリポートとしては高く評価できない場合もある。とりわけ1995年度はなぜかこの手の消極的協力学生が頻出した。
- I 三重大大学の場合には、リーダーとなった学生もそれまで同様な経験を高校までで積んでいる場合は少なく、自分の知られざる才能を発見して驚く場合も多い。
- J 多少言いにくいことだが、この面接は結局授業時間外での無償奉仕のオフィス・アワーである。共通教育の導入とともに、この主旨は部分的には主題研究として制度化されたが、それを担当する教官の負担は純増となっている。一部の教官の犠牲的な奉仕精神に頼った改革は、個人的には成功しても、長期的には定着しないであろう。
- K 学生が必要とする文献がほとんど見つからない付属図書館の現状は、学生の勉学意欲を著しく殺いでいる。総合科目など、狭義の領域を又に架け境界領域を開拓する問題意識をもつ授業科目の場合には、従来の十進法分類では参考書がバラバラに配架されてしまって、役に立たない。また最近備えられた書籍はコンピュータ検索ができなければ配架場所が分からないが、このコンピュータ検索が無闇に複雑な入力方式に加えて初心者が触れると故障するという代物で、新入生に敬遠される結果ともなっている。そうした理由から授業用の図書を課題図書として別置することも提案したが、過去にうまく機能しなかった前歴があるとかの理由で、拒絶されている。この点に関しては、一般教育図書委員会委員長の立場から指摘したことがある⁽⁹⁾。とりわけ予算の制約は深刻であって、図書館側の努力にもかかわらず、学生の自主的勉学にとってなおきわめて劣悪な環境であることは、現状の図書館運営の方式では、容易には解消困難な問題である。全学的な議論に期待したい。
- L 事務当局との摩擦は当然予想したものであるが、学生の側からみれば当然学費納入者として知る権利のあるはずの情報が、じつにさまざまな理由で公開されていない現状を、はからずも知られることとなった。図書館運営費用の大学間格差、学生の書庫内立入禁止、『三重大大学教官総覧』の学生への閲覧禁止

(当時)など、理不尽な規制の存在そのものに、多くの教官は気付いてすらいない。「規制緩和」に教官はいますし積極的であるべきではなかろうか。

M K項を参照。

N これも学生運動などが盛んな大学では到底実現不可能な牧歌的な光景ではあろう。逆にいえば、学生たちは互いに連絡をとる手段ももたないままの学園生活にとりたてて不便すら感じないという程度の知的生活に甘んじていた、という実態も露呈した。

O こんなことまで指導せずとも、との声もあるだろうが、そこまで現在の学生は自分たちでなにかを作るという経験から疎外されている。第三者が手にすることを前提とした作文や報告提出の経験が皆無のためか、普通の世の中であれば形式的にまったく取り合ってもらえないような欠陥書類をそうとも気付かず堂々と提出する。センター試験の穴埋めさえできればよいというこの国の教育の荒廃ぶりを知るには、レポートを提出させるだけで十分なはずだが、なのに教官側は何ら危機感も感じずに採点しつづけてきたのだろうか。

P この呼びかけについてはE項参照のこと。全学の教官の協力によってひろく全学共通セミナーを発足しよう、という発想は、ひとつにはこうした学生たちの自主的研究グループの顧問的な性格を勘案して生まれたものである。こうした教官による自主的な全学むけセミナーの開設は、大学によっては大学紛争直後からすでに20年以上の経験をもつところもある。しかるに本学ではこうした試みはようやく1995年度に試行されたにすぎない。またその規模も学部別のオリエンテーション授業と、30ほどの共通セミナーが実施されたにとどまり、全学生が共通セミナーをひとつ受講できる体制にすらなお至っていない。そして1995年現在、本学の各学部では、専門・一般の負担問題が蒸し返され、全学的な共通セミナー開設に対して前向きではない議論が先行しつつあるようで、憂慮される。

6 グループ活動への指導上の難点

さて、実際にこのような学生による研究グループを発足させると、どのような主題が選ばれるであろうか。資料4に示すのは、1995年度の場合のアンケートの集計。資料5は実際に学期末に提出されたりポートによるグループ一覧である。

資料 4 1995年度のアンケート集計時 (4月下旬)での希望研究主題

- A 海／捕鯨問題／イルカといっしょに泳ぐ／動物の一日の行動／羊の世話をするひとの意見／遊牧／／
- B 中国旅行計画／香港／台湾／紫禁城／ギリシア／エジプト／アフリカ／インド／シルクロード／沖縄／熱帯雨林／／東南アジアの食文化探訪／ラーメンやカレーの日本化／饅頭の由来／／
- C マスメディアの仕組み／ラジオ番組制作の現場／新聞社の舞台裏／／インターネットはどうなっている／図書館の仕組み／／
- D 大震災と復興の歩み／都市計画／／平和問題／／環境問題
- E 喫煙・禁煙について／／日本に住む外国人の生活と意見／留学生の声を聞く／／
- F キャンパス考現学／キャンパスの自転車対策／／農家の声を聞く／自由化問題と跡継ぎ／／
- F なぜ病院で待たされるのか／ボランティア活動について／老人ホームを訪ねる／福祉制度の国際比較／盲導犬／／
- G 三重県の街道の変遷／三重ショッピング地図／津飲み屋地図作成／津市のゴミ対策／町屋海岸の汚染について／／
- H 子育てと児童教育の国際比較／世界のなかの日本の教育／管理教育は是非か／校則とは何だったのか／／
- I 学食メニュー比べ／他の大学生はどんな生活をしているのか／授業改革について／／
- J 美術館・博物館の仕事／ミュージシャンになるには／競馬の文化史／日米の野球の比較／俳句／ファンタジー文学／／
- K 気候と宗教の関係／笑いの比較文化／礼儀の比較文化／「残業」の倫理／ユニフォームとは何か／「頭の良さ」の国際比較／姓名記載の国際比較／国民性の比較、風俗習慣の比較／自然条件と国民性／／自由な国とは何

かというアンケート調査／／
 L まだやりたいことが分からない／はやく
 見付けたい／何かについて研究したい／ひと
 つの問題を研究したい／やりたいことなど別
 がない／目下考え中／何でもよいから研究し
 たい／何か研究したい／／

簡単な注釈：

A、B、C群は結局主題としてグループができた。ただし今年はAのイルカの異常繁殖で、あまりに殺到したためいくつかのグループに分かれてもらったところ、でき不出来が極端に片寄った。大勢いるなら安心とばかりに、さして問題意識もないままに付和雷同的に参加した学生と、問題意識を貫いたリーダー格の学生との格差も著しかった。

Bグループはグループとしてのまとまりは良かったが、事実調べだけを書き写してもリポートにならない、という忠告を無視して、『三国志』の年表だけを提出したチームや仏教に関する概説書を何十頁も筆写しただけのリポートもあり、内容には飽き足らず。

Cは期待していたのに、結局新聞社を訪問することひとつせず、誰でも知っている俳優数人のゴシップを並べただけの情報量ゼロの無責任な趣味的作文が出て来ただけ。

Dは比較文化とは違う授業で正面から取り上げる先生があるので、そちらに行けと指導。

E、Gは人文学部の学生が主体だったが、結局学部のアオリエンテーション・セミナーで同様の課題に挑戦した様子である（紫田論文参照）。

Fは教育学部の看護学科進学予定の学生を中心として、現場の訪問までして努力したものの、リポートの章ごとに社会福祉の個別の問題を扱おうとする姿勢と、複数の施設の訪問とを強引に1対1に対応させようとしたため、せっかくの訪問で得たはずの具体的な情報をリポートに盛ることに失敗し、無残にも空中分解した。盲導犬の調査は本年もっとも成功した企画のひとつ。

H、I、Jは結局思い付きに終わったものが多い。とりわけ競馬の文化史には期待していたが、競馬ファンらしいたったひとりが殴り書き

した問題意識不鮮明な作文に、なんと5名の学生たちが名前を連記するという最悪の状態で、あらかじめそうした手抜き工事では点を均分に割り算してばらすぞ、と宣言しておいた手前、やむなく全員不合格とした。

Kはいかにも手垢のついた問題設定で、こうした先入観で「比較文化」を捕らえることの危険性を説いたうえで転進をお勧めした。

なおLのような回答をアンケートに書いてしまう学生が1割近くいる、という事態は、4月現在の新入生なるものの意識調査として、きちんと把握しておいたほうがよいだろう。学期末にこれがどのようなレポートに結実したかを示せば、次の資料5のごとくであった。

資料 5 1995年度の受講学生による自主的研究グループの研究課題（順不同）

（黒丸が各グループ。括弧のなかは、それぞれのレポートのなかの章だて）。

- ア Let's swim with Dolphin（生態、固体数、出産、会話、心の癒し、イルカと泳いでミルカ）[6名]／● イルカ クジラについて（生態、シャチ、コミュニケーション、捕鯨）[6名]／● イルカを知る[5名：分担不明]／水族館のイルカ（まえがき、イルカの進化と歴史、水族館のイルカ：南知多ビーチランド紹介、コミュニケーション、出産と子育て、食事と生活、諸問題の提議[ママ]、あとがき）[5名]
- イ 仏教の広がり（パリー語圏、チベット語圏、漢訳圏）[6名]
- ウ ザイールの見る夢[個人]
- エ マレーシアを知る（民族、宗教、経済、政治、社会、教育）[8名]
- オ 各国の映画の比較文化（アカデミー賞、プロモーション、アジア映画の日本、チャップリン、戦争）[5名]
- カ チェルノブイリ（原因、被害、現状）[3名]
- キ マスメディアについて（アメリカの新聞、入試報道、歴史、地方版、タレント、CM）[6名]
- ク 盲導犬（前書き、歴史、盲導犬について、盲人、中部盲導犬協会、現状の問題、参考文献、後書き）[5名]
- ケ 生物資源学部コース分属（しくみ、目的、意識調査、他大学との比較、大学側の見解、

資料、改革案) [5名]

- コ カウンセリングについて(歴史、フロイト、理論、心の危機、多重人格、音楽療法、阪神大震災と心理的ケア、出版物購買の心理分析) [11名]
- サ 中国研究(歴史班1:紫禁城、歴史班2:『三国志』歴史年表、食文化班:麺類について) [12名が3班に分かれた]
- シ ハワイの子らにバスケット・ゴールを(動機、アプローチ、活動報告、終わりにあたって、今後の取り組み) [6名]
- ス 在日朝鮮人について理解を深める(はじめに、植民地下の教育と教科書、解放後の歴史教育、韓日歴史教科書の比較、おわりに) [4名]
- セ 集団と制服の職業的役割(女性の制服、制服と管理教育) [2名]
- ソ ヒシアマゾンという馬について [5名:執筆分担なし]
- タ 大黒屋光太夫の漂流記(フィールドワーク、ロシアでの生活、ロシア帝国の発展、帰還後の影響) [4名]
- チ 日本の老人ホームとスウェーデンの社会福祉制度(老人ホーム調査、スウェーデンの報告) [12名]
- ツ 下宿生活と食品添加物 [9名の参加者がそれぞれ何らかの添加物を調査]
- テ イギリスを知る(階級の実態、複線教育、イースターとクリスマス、紅茶、ロック、スポーツ、ナショナル・トラスト)

注釈:

ア、イは既に見たとおり。水族館でイルカの世話までしたグループもあるが、その内容がきちんと報告できておらず、遊んで来た段階に止まっている。ホエール・ワッチングなどの実際の情報も集めてきたが、情報カタログの域を越えず、オタク的傾向が色濃いのも問題。チーム・リーダーのカリスマ性にほかの学生が引きずられた形跡も濃厚。

イのような題材はついもの調べ的な発想で飛び付いてしまうものらしいが、目的意識が希薄で概論以上の踏み込みがない。たとえば土着宗教との葛藤のありかたの地域的な差異といった視点が未成熟。高校までの教科書が概論だけなので、学問とは概論の事、といった思い込みがあるらしく、その先の研究の世界が容易にはイ

メージできないらしい。

ウはサンガ先生に同行した学生の報告で、現地での驚きとそれを理論化しようとの精一杯の知的努力とが緊張感を孕んだ叙述となっており、フィールドワークの原点として貴重。

エも元来の問題意識が役割分担の途中で不鮮明となり、概論を包括しなくてはという発想にとらわれたためかえって何故マレーシアなのかが不明となった。ただし学生たちはこの経験を出発点にして留学生との交流を図り、現地への旅行を夢見ているから、1年生前期での勉強は準備だったと解釈したい。こういう場合には将来が期待される。

オとキとは先に触れたとおり、不徹底なオタクの水準で、態度としてもはなはだ醜惡。

カは調べたかった意欲は理解できるが、常識的な線に止まっている。

クは調教現場での体験が学生たちの発見や知的覚醒に連動した例で、盲人という異なった文化を持つ人々の世界を知り、盲導犬というペットとは異質の発想で人間への奉仕を義務づけられている家畜のありかたに、いわば文明的な疑問を感じた学生たちの思考錯誤が美しい軌跡を描いている。盲導犬の思想は学生たちには牧畜文化の発想と映ったらしい。

ケは調査のうでで本年度一番摩擦を起こした話題であったが、学生たちに自分たちを包んでいる環境を理解する機会を与えることができた点も含め、地道に必要な作業であった。

コはどうやら別の講師の授業内容を集団的に流用した形跡があり、音頭を取ったであろうリーダー格の才覚は認めるにしても、授業で要求した活動とは無縁の彌縫策であり、本来あまり有り難くない性質のレポートであった。文化比較での心理学的アプローチは大切であり、筆者自身1990~91年頃には授業で解説し、専門の論文もいくつか公刊している。それだけに、こうした事態は遺憾だが、必ず毎年1グループはこの手合いが現れる。

サは上に述べたとおり。ご専門の斎藤明先生にも相談に乗っていただきながら、十分にそれを生かすことができなかった。本来なら文化の

伝播の一面として豊かな可能性があったはずの話題。立案の段階で、いますこし指導ができていたならば、と悔やまれる。

シは新聞でも大々的に取りあげられたヴォランティア活動の報告であり、ある意味で教官の意図を具現した企画であるが、しかし実際のヴォランティア活動を授業の一環として実践されては、大学での教育活動の許容範囲を逸脱してしまう。善意が社会の仕組みと抵触する臨界について、このグループにはいろいろとお説教をする羽目となった。だがそうした限界に触れることもないままで完結してしまうような勉強のほうが虚構だろう。授業の延長をすでに越えて巢立ちをし、自主的なサークルへと羽ばたいたこうしたグループの健全さを大学が容認できないとすれば、それはかえって大学の硬直ぶりと閉鎖性を証しする事態といわねばなるまい。学生たちの成長ぶりにも見えて頼もしいものがあった。

スは同様に大切だが困難な課題であって、結局朝鮮人学校や在日韓国人たちからは色よい返事をえられなかった学生たちは、そこで初めて問題の複雑さを悟った様子であった。

セは実社会での経験のある社会人編入生が提案したもので、北米の社会環境にも精通した学生ならではの視点もあり、本来なら比較文化の授業において正面から論じるべき話題である。だが、日本の学校の規制や校則を当たり前と思ってきた“普通”の新入生たちには、かえって何が問題なのか実感が沸かず、賛同者も多くは得られなかった様子である。

ソは既に見たとおり、せっかくの主題なのに、あきらかに教師がレポートを読まずに採点することを狙ったとしか考えられぬ、悪質な手抜き工事。ただし競馬を話題にしたから落とされた、といった噂をひろめようか、といった下心も仄かに感じられて、教師としてははなはだ質[タチ]の悪い手合いである。返却したレポートには、不合格の理由と、競馬の文化史たる以上、本来ならばこうすべきである、という改善案を詳細に記しておいた。

タ、チ、ツ、テはいずれも本来ならば個々別々

に専門の教官がセミナーを開講していただきたい主題であるし、また実際それが可能なはずである。タのような話題は、三重の歴史散歩、文学散歩といった企画で地元大学ならではの成果をあげることが望まれよう。近世以降でも松尾芭蕉、本居宣長、谷川士清、大黒屋光太夫、松浦武四郎、斎藤緑雨、佐々木信綱、泉鏡花、佐藤春夫、西村伊作、梶井基次郎、小津安次郎、三島由紀夫、中上健次などなど。その足跡を調べれば興味深い人物は何人もあって、鉅脈も無尽蔵、話題には事欠かない。

チはご専門の児玉克哉先生に、ツは同じく高山進先生に、そしてテは服部範子先生にそれぞれご指導をお願いして、快く受け入れていただけた。要は、担当教官にその適性がない場合でも、学生の問題意識を受け止めてくださる先生さうまく発見できれば、学生たちの自主性を尊んだ共同研究は成立するのである。必要なのは、そうしたネットワークを教官のあいだで日常的に張り巡らせておき、学生の指導に対応できる体制を整えておくことだろう。

7 現状の問題点

とはいえ、現状での「比較文化」での学生のグループ研究には、なおいくつも重大な欠陥や問題点が含まれている。列举すればそのうち最大のものは以下の3点であろう。

- (1) 学生諸君の意識そのものによって授業成果が大きく左右される点。これは、自由選択科目のカリキュラム上の位置付けや学生の学習意識が改まらないかぎり、抜本的な改善はむづかしい。具体的には、1992年の初めての試みの高揚に比較して、1993年度は学生側の意欲が一様に低く、課外活動を要請されることそのものへの消極的な反応が多かったため、グループ活動の自己組織傾向も低調で、責任者となった学生が意気阻喪するケースもあった。これに比べて1994年度は全体としては学生たちに前向きな姿勢がみられ、授業での指摘を巧みに取り込んで、情報量も高く、資料批判も確実で、しかも具体的な建設的提言を

盛り込んだ高度な研究成果をまとめあげたグループも複数出現した(資料6)。この年はほぼすべてのグループが方法としての比較文化に高度の関心をもつグループ活動を行ったと評価できよう。だが1995年度の場合、上にみたように比較文化という問題設定とは無縁の主題が増え、また参考書の丸写し、グループのリーダーに依存した自主性のない調査報告の増加といった退行現象も顕著になってきた。

- (2) また、前期の授業におけるグループ活動の成果を後期の授業へと連絡する制度的保障がなく、授業が終了すれば学生との繋がりも自然消滅するため、結局優れた成果があげられても、それを学生論集のようなかたちで年度末にまとめることができずにいる(これについては、本論と並んで掲載される予定の、総合科目「世界の人々とその暮らし」の企画・運営にかんする報告をも参照されたい)。
- (3) だが最大の問題は、はたしてそもそもこのような授業が大学の科目として相応しいのか、という教育の根幹にかかわる問題だろう。担当教官の守備範囲が不明なままに、最低限の形式的な要件さえクリアーしていれば、それこそ何を取り上げてよい、といった印象を与えかねない課題設定であり、また「比較文化」なる授業科目との関連もこれではあまりに不明確ではないか。学生に自主的な取り組みを求めるという設定そのものには意義を認めるにしても、それを「比較文化」という授業科目の枠のなかで実施することそのものに疑義があるのではないか。いわばこれではあまりに無手勝流で、無責任きわまりない授業ともなりかねない、という危惧が出て来ても不思議ではあるまい。

資料 6 1994年度のグループ・リポート一覧

●教育とは何か

- 高等専門学校と大学との比較—自分たちの経験を通りして
- 日本の外国語教育—諸外国との比較から—わたしたちの提言

—大学の学費を調べる／歴史的経緯／私立と国立の比較／国際比較

—教育制度の内外比較—いまからあるべき教育とは

—社会人のための大学について考える—社会人選抜と日本の社会

—日本の大学はどこがおかしいのか—諸外国との比較から

●知ってるつもり三重大学

—外からみた三重大生、近所の町内の声、他大生の声の聞く

—学内自転車問題／現状／問題点／実地定点調査／わたしたちの改善案

—大学のゴミ調査と提言—清掃係のおばさんの意見を聴く

—大学の図書費はどのように使われているのか／わたしたちの提言

●日本に住む外国人の人たちとわたしたち

—留学生と交流する会／企画の報告／記録と運営／将来への展望

—外国人出入国問題：現場の担当者や外国人の意見を比較して

—不法滞在外国人労働者問題とは何か：出入国管理局の立場と外国人の立場

●文化摩擦を考える、文化摩擦を体験する

—捕鯨—さまざまな意見の相違とその背景

—外国の食生活：三重県エスニックレストラン地図とシェフの意見

—サッカーの国際比較：ラテンのサッカー、ヨーロッパのサッカー

—サッカーと文化摩擦／マラドーナ問題の背景を探る

—外国映画にみる日本人イメージ／日本人イメージの国際比較

—永野法務大臣発言とその国際的反響：各国のメディアを比較する

●社会の仕組み、社会の問題を自分たちの足で調べよう

—原子力発電所問題—なぜ地元漁協は分裂したのか：調査と提言

—女性差別の比較文化—日本に住む外国人女性に聴く

—公園調査、いくつかの公園を比較調査して理想の公園を津に提案する

—自転車重視の町造り：エアランゲンと津を比較して

—日雇い労働者の生活と意見：「浮浪者」といわれる人々に学ぶ

—自動車産業訪問：不況のなかの地場産業経営者、従業員に聴く—

●調査旅行：現場を踏もう

－故郷の歴史建造物を尋ねる：管理する人々の苦勞、運営のノウハウを学ぶ

－水族館を内側から覗く：飼育係の一日を追体験

－志摩スペイン村調査：働いている人たちの側からみたテーマ・パークの姿

－三重の図書館事情調査：読書環境の改善のために

●身近な国際問題に目を開こう：わたしたちに何ができるか

－ルワンダ内戦とその原因：サンガ先生に聴く／国際報道の裏を探る

－青年海外協力隊：その夢と現実／日本社会の問題点を映す鏡として／経験者に伺う

－エイズと日本社会：歴史的経緯／倫理観の文化的差異など

－日本の外国への経済援助、その実情を調べ、あるべき真の貢献を提言する

－国際公務員とは何か／どうすればなれるのか／なぜ日本人が少ないのか

－自衛隊員の生活と意見／海外派兵について自衛隊員はどう考えているのか

●わたしたちの環境問題

－藤前干潟リポート：現地でもみたゴミ問題と環境保全

－町屋海岸と津市海岸の汚染について：市当局の対応を伺う

－津市のゴミ対策はどうなっているのか：突撃インタビュー

すことができるように考えられる。

(1) まずは要するに、従来の日本の大学教育における欠落部たる、学生の自主的研究、小人数のグループによる共同活動といった面を補完するといっても、それは所詮個人による週1度の授業形態では不可能である。本授業の意図するような目標を達成することは、現状では物理的にも教官個人の能力の限界からしても、到底不可能である。受講人数の過多(250名程度出席)、授業頻度の低さ(必要な情報を与えるには絶対的に時間不足)、学生への指導の不徹底(これには小人数のグループごとの課外指導が不可欠)、教官の専門分野以外での指導不全などは明らかであり、現行の授業形態では頭打ちの状態にある。

(2) 本科目の意図を実現するには、入学直後の学生を対象として、(ア) 高等学校までの勉強観からの転換を図り、そののち(イ) 総合科目方式によって問題意識を植え付け、(ウ) さらに専門分野ごとの通常の授業を複数組み合わせる体系的な知識を側面から獲得させ、(エ) それとともにセミナー方式の授業による小人数グループ活動の実践的指導により、学生にout-putの作業をする機会を与え、(オ) それを「論文作成」において結実させる、という5段階の工程を有機的に組み合わせるような体制を導入することが不可欠であろう。

(3) 本年度からは主題別科目「E. 国際理解と異文化接触」の運営により、そこでの「比較文化：異文化接触論」(優れて「異文化」たる大学での勉学のオリエンテーションをも兼ねる、総論的なイニシエーション)[上記(ア)と(ウ)に相当]、「総合科目世界の人々とその暮らし」での意識開発[同じく(イ)に相当]、および「主題研究」[同じく(オ)に相当]を担当する。これによって、どれだけ現在の限界を越えることができるかが、本年度以降の課題となろう[表記について蛇足ながら、個人的には発音上「オリエンテーション」という表記を好むが、「オリエンテーション」が大学の書類上の公式表記となったため、これのみ例外とする]。

8 改善のための提案と将来への課題

学生たちに質問を重ねて行くと、それなりに現在の社会について多様な問題意識を抱えていることが分かってくる。しかしながら従来の大学の一般教育ではそれを汲みとることが極端なまでにできていなかった。だが一方そうした問題意識を汲みあげるには、従来の授業形態や科目ではまったく対応できないことを暴露してしまったのが、比較文化での実験の「惨状」でもあるだろう。これらの複合した欠陥を克服するにはいかなる方策があるだろうか。到底ひとりの力では解決不可能な膨大な課題を抱え込んでしまっただけで数年間悪戦苦闘してきた担当者として、状況を分析すれば、以下のような論点を洗い出

ただし、この来年度むけの改善案にもすでにいくつか問題点は指摘できる。

- (4) まず大学教育へのイニシエーションの授業は、本来「比較文化」の授業そのものとは別に開講されるべきものであろう。たしかに1994年度までは1年生を主たる対象として学習観の転換を図る機会、なお全学を通じて過小であり、不本意ながらこの努力は継続を要すると考えてきた。しかしながら本1995年度からは各学部が新入生を対象としてオリエンテーション科目やオリエンテーション・セミナーを開設した。あるいはそちらで新入生を対象とした勉学観転換の授業が組織されてゆくことだろう。そうなれば、1995年度まで一般（共通）教育の「比較文化」で実施してきた、大学での勉学の動機付けにあたる部分は、あるいは学部でのオリエンテーション科目に今後譲ってゆくことも可能だろう。
- (5) ついで学生による自主的な共同研究の部分は、本来ならば「共通セミナー」において吸収すべき部分であろう。「比較文化」の主旨に照らした「共通セミナー」[(エ)に相当]もできれば開講したいところであるが、「比較文化」の場合には担当者が1名のみ、なおかつ一般教育のフランス語教育も担当するという特殊な立場にあるため、現状では遺憾ながら物理的に不可能である。さらに一般化してみれば、本来ならば同一の教官が特定の主題に属する総合科目の運営と通常科目の概論とさらに共通セミナーを一貫して担当することで、全体を配慮しながら、複数の授業を有機的にすすめることが理想であろう。だが、実際にはこれだけの負担を教官が支えられるシステムは現在の学科目制度では導入が不可能だろう。さらに、すでに見たような学生の多様な欲求に応じるためには、理想的には専任教官ひとりひとりが最低ひとつ程度の共通セミナーを担当できるような教育環境が必要となるだろうが、これまた現在の一般（共通）教育を担当している教官の出講コマ数だけでは、到底こうした欲求に応ずるだけの余裕は期待できない。学科目の教官定数に応じて、

学科目ごとに出講コマ数を算定する現在の原則に固執するかぎり、統合教育の理念と実際に可能な運営とのあいだには、おおきな落差が残る続けることになる。

- (6) このなかで、学部のオリエンテーション・セミナーは本来内容においては共通教育科目との連動のなかで運営されるべき性質をもつものの、本1995年度の場合、実際には制度上・運営上（人文学部、教育学部においては1996年度以降も）共通教育の外に出されている。このため、両者の協力が制度的に不可能な事態となっている。その結果、学部によっては共通教育、専門教育の双方で似たような授業が二重に運営される無駄や、内容の無意味な重複、またその裏返しとして、どちらも建前としてはそれぞれで完結したメニューを提供しなければいけないのに、実際には物理的にも授業時間のうえでも不徹底で中途半端な授業となっている、などの問題がすでに指摘されている。学生の側から見ても、なぜ専門教育でのオリエンテーションが週1コマだけ共通教育のなかに割り込んでいるのかは、容易には納得しがたいだろう。

また人文学部文化学科の場合、週1コマでは、セミナーとしてもオリエンテーションとしてもアブハチ取らずで、学生としては絶対的に作業時間が不足する一方、世話をする教官のほうは目も回るほど多忙にすぎて学生指導にはとても十分には手が回りかねる有り様となった。こうしてみると（制度上改変が困難な教育学部は別としても、少なくとも人文学部文化学科の場合）、オリエンテーション・セミナーは一般教育改革検討特別委員会が当初提案したように、あくまで共通教育の一貫として、それ以外の統合教育科目とも不足を補いあい、互いに支えあって連動して運営なくては、所期の効果をあげるのは困難であるように思われる。

- (7) 最後に旧来の一般教育における「比較文化」担当者個人のことに付いて敢えて付け加えたい。本文に触れたように1994年まで「比較文化」のなかでこなしていた種々の作業の

いくつかの部分は、1995年度から一般（共通）教育と専門教育に跨がる、それぞれ異なった形態の複数の授業へと分散した。だがそのために、かえって物理的な負担が一举に数倍に膨れ上がったことも否定できない⁽⁴⁾。従来までの授業に加えるに、学部のアオリエンテーションの設定やノウハウ、運営の世話、一般（共通）教育での主題のチェアパーソン、主題研究の世話、さらにはあらたな授業運営機構である統合教育部会での作業などが、それぞれ現実に最低週1コマずつ（あるいはそれ以上）の時間を拘束する負担となって折り重なってきた。学部のアオリエンテーション・セミナーの世話と共通教育のチェアパーソンの役割とを同時にこなすのは、それだけでも事実上週2コマ授業が増えるに等しい。本年度の場合は移行過程でいたしかたなかったにせよ、特定の教官に荷重な負担が集中することは、長期的には解消されるべきであろう。

その一方で、専門教育での「比較文化」および大学院での「比較文化」という関連科目との連動はなお制度的に不自由なままであって、比較文化という授業科目を全学的な視野から一本化して運営できる体制とはなっていない。この点も、共通教育機構の導入にとともに考慮されるべき、将来の改善課題であろう⁽⁵⁾。

註

- (1) その理念に関しては、阿閉義一「統合教育のめざすもの」『大学教育研究』、第3号、三重大学一般教育、1995、pp. 77-85を参照されたい。
- (2) 『一般教育の改革にむけて—三重大学一般教育問題検討特別委員会最終報告書』、三重大学一般教育委員会、1993年7月、p. 4. 教育改革に関する論議が、その後この冊子を見捨てて進行しているに等しい現状には、冊子作成に携わった委員のひとりとして、ここで明確に危惧を表明しておきたい。
- (3) 阿閉前掲論文〔註（1）〕 p. 81.
- (4) 『三重大学における「一般教育」』、1992年度、三重大学一般教育自己点検・評価委員会、1993年発行、pp. 45-46. おなじく1993年度 pp. 17-20参照。
- (5) 『三重大学における「一般教育」』、1994年度、三重大学一般教育自己点検・評価委員会、1995年発行、pp. 17-18.
- (6) この質問項目のなかで、アオリエンテーションについての学生たちの意見は来年度の実施に際して改善のために活用する予定である。
- (7) サンガ・ンゴイ・カザディ、「アフリカと真の援助」、『三重大生協ニュース』第94号、1994年4月22日発行。なお同じ号にたまたま筆者にたいするインタビュー記事もあるが、ここにも学生向けに、本論での主張を補う大学生生活への導入と大学改革観を述べている。
- (8) 毎日新聞 1995年8月24日（木）、伊勢新聞 8月26日（土）、中日新聞 8月27日（日）にそれぞれ掲載。
- (9) 付属図書館の問題点については『三重大学における「一般教育」』1992年度、pp. 150-54で詳しく指摘し、付属図書館から誠意ある返答を戴いた。その概略となお残る問題については1993年度版 pp. 98-101参照。1994年度版 pp. 110-16は自己点検・評価委員会からの要請がなかったため、本文についてはデータを更新しているものの1993年版と重複が多い。なお、視聴覚メディアの拡充については同書 pp. 114-116で、経緯、現状、要望というかたちで論点を整理してある。
- (10) 拙文「幕引きの弁」『一般教育通信』26号〔最終巻〕（1996年3月刊行予定）にその間の事情を報告した。
- (11) 総合科目「世界の人々とその暮らし」の運営については、本誌掲載の別稿「『世界の人々とその暮らし』の5年間」を参照されたい。